

# ちよつとつこ話

第百七十号

虫と道

春は新しい門出を祝う活気あふれるシーズンの幕開けです。森は緑に鳥は歌い、花は咲き、と宴うたげの気分です。小学二年生何ぞはピカピカのランドセルのぼうが大きく見えます。春はうららか気候も温かくなり、なんとなく、春眠しゅんみん 暁あかつきを覚えず、気も緩ゆるみがちになります。

そこで良寛りょうかんさんの一句「散る桜 残る桜も 散る桜」人間の生命力は短い物です。なすべきことは、なさねばなるまい。春に出て来る蝶々ちやうちょうなら可愛いが、人間の心を好んで蝕むしばむ虫がいます。例えて申し上げますと、弱虫、泣き虫、疖かんの虫、蛆うじ虫、苦虫にが「虫酸むしずが走るいやな虫達です。良虫達もいます。虫が知らせる、虫が納おさまる」、なんぞは大いに役立っている虫なのである。

人間様は目には見えない心、魂によって動かされていると思っています。私は耳で感じ取る音の感覚聴覚が一番、二番に鼻で感じる臭覚しゅうかく、三番目に初めて目で感じ取る視覚になると思っています。目は物が真っ先入り易いので失敗も多くなるのです。五感全て平等に扱うのは難しい事です。心「無」なれば全ての判断に誤りは生しょうじないと思えますが、人間の心は心臓と同じように常に揺れ動いているのです。虫が活躍かつやくするのも当然のことなのです。唯ただ、自分の動きを知る事に由って虫の動きも大きく変わってきます。茲こゝに自分を見つめる静寂せいじやくな時間が必要になるのです。名は体を表す」と申します。まさにその人の生き様いきさまが出るのでしよう。親に頂いた名前を大切にすることが親孝行の一つでしょう。我々は「暗いトンネル」を出て生まれてきますがその時に 私の名前は・・・でございます。お父様、お母様宜しくお願いします」と自己紹介をした赤ん坊は一人もいないと思います。最近「戒名かいな」は要いらないとおっしゃる方がみえるそうですが、私ほとんどないことだと思います。死者も赤ん坊と同じです。自分で名前を付ける事が出来ません。故に、命終に際し暗いトンネルに入る前に「お坊様」に名前を付けて頂き「阿弥陀様に受理して頂くのです。そして「閻魔の庁てい」で判決を受けます。名前の無い方は呼んで頂けないので暗いトンネルから出る事ができません。ですから阿弥陀様に呼んで頂く為の名無ななしは極楽に迎えられる事は出来ないと思っておりますし、人間様はそれ程偉くはなれないと思っております。

四月に行われます当山の「六道巡り」は親に心配を掛けていないだろうか、草葉の陰で泣いていないだろうか、等々生活態度を見直す一年々の修行です。判断は閻魔大王様がして下さいます。

北島三郎氏の歌に「ではく氏作詞の「大道」という歌があります。義理だ 恩だは古いと笑う そういうお前は一人で暮らしてきたのかい 世の中は持ちつ持たれつ生かされ生きるはずしちやいけない人の道。・・・やさしさ忘れぬ人の道。受けたご恩は世間に返す・・・情けがみちづれ人の道。」と短い人生をより短くしない様に人間としての道を進みましょう。親を捨て、子を捨て、私も捨てらる。儚し 墓無し」

四月一日

善壽男油掛地藏尊